

Self-Control System of Groups : Comparison between the Date of Achievement-Regulation Task and those of Level-of-Aspiration Task

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20606

集団の自己調整システム

—業績調整課題と要求水準課題の比較—

太田 雅夫

研究目的

筆者は、小集団の目標追求活動における自己調整システムを取り上げ、目標設定、活動、評価、調整等というサイクルの形成をこの観点から検討してきた。このサイクルには、種々のフィードバック機能が働らくと同時に、フィードフォワード機能が働らくものと考えられたのである。人間や集団は、フィードバック情報の活用のみならず、フィードバック情報以外の様々な情報を用いて目標追求活動を行うとみられる。フィードフォワード情報等のフィードバック情報以外のものは、フィードバック機能の十分に作用しない状況の下でも目標追求を可能ならしめるであろう。そこで筆者は、個人のフィードバック機能とフィードフォワード機能が個人または集団の目標追求活動においていかに作用するかを明らかにしようとしてきたのである。

これらの機能は、個人または集団が解決する課題によって役割を異にするであろう。いわゆる要求水準を問題とする課題は、業績が高ければ高い程望ましい課題であり、個人や集団が各々の能力の許す限り最大の業績を獲得するように努める。しかし、この業績は、個人や集団の望むようには向上させることができないのが普通である。そこで目標水準をいかに設定して業績を向上させようとするかという課題とみることができ。これに対して、業績が適切になることが求められ、目標水準はその適切なものを示し、業績をそれに接近させるように努める

課題は、業績を調整する課題とみることができ。この場合、目標水準に応じて業績を加減することがかなり自由にできるものであろう。

課題をこのように二分するとき、前者を要求水準課題、後者を業績調整課題といえることができる。筆者はこれまで、要求水準課題を個人に課し、目標追求過程を目標設定、活動、評価等のサイクルという観点から分析することも試みた。そして個人の結果から明らかとなった傾向が、集団に要求水準課題を課したとき、認められるかどうかという検討が必要と感じられた。もちろん、これまでも集団の要求水準を取扱った研究は、いくつみられるが、フィードバック機能およびフィードフォワード機能の観点からみていないものがほとんどである。

そこで今回の実験では、集団に要求水準課題を課したときの自己調整システムの特性を業績調整課題を課したときのそれと比較することにした。筆者は、これまで簡単な加算作業を用いて集団の様々な特性を調べてきたので、今回も要求水準課題と業績調整課題の双方に共通する作業を用いることにした。

このシステムは、 W_1 から W_4 までのオペレーターをもつとし、各要素とそれらの入出力の間には次のような関係が成り立つと考えることができる。

$$\epsilon = G - P$$

$$G' = W_3 G$$

$$\epsilon' = W_1 \epsilon$$

$$P = G' + \epsilon'$$

$$G = W_2 \epsilon$$

$$V = W_4 \epsilon$$

ただし、Pは集団業績、Gは集団目標、 ϵ は両者の差、Vは自己評価である。これらは差分方程式を含むもので、

$$G'(t) = \alpha_3 \{1 - E^{-1}\} G(t)$$

$$\epsilon'(t) = \alpha_1 E^{-1} \epsilon(t)$$

$$G(t) = -\alpha_2 E^{-1} \epsilon(t)$$

$$V(t) = -\alpha_4 \epsilon(t)$$

となる。そして α_1 から α_4 までの係数は具体的入出力から線型回帰係数を用いて推定した。

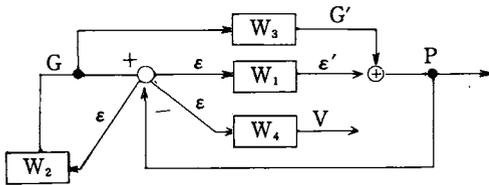


図 ブロックダイアグラム

研究方法

被験児——被験児は、金沢市立材木町小学校および芳斉町小学校5年男子で、各々5名よりなる2集団を編成した。予備検査により、実験で用いたのと同様の作業を課し、集団内の個人の業績に格差がありながら、集団業績が可能な限り同程度となるよう集団成員を選んだ。作業は、0から9までの乱数系列に各々1から5までの数を加えるというもので、各回20secずつ15回行なった。実験において作業を行う成員の1から5までの加算数別および全体の平均業

績、標準偏差を示すと表1のようになる。A、B両集団の成員個人の業績の平均間には若干の相違がみられるが、ソシオメトリーによって、被選択数、相互選択数や被排斥数の極端に多い者を除き、とくにA、B両集団成員間に選択、相互選択、排斥の関係がみられないように成員の選出を行ったので、やむを得ないものであった。

実験の手続——各集団の4人の成員の行う作業は、予備検査の場合と同じであった。すなわち、用意した乱数系列別に成員のひとり1を加算し、別のひとは2を加算するという具合に、成員が各々異なる加算作業を行なった。加算作業を行った4名の作業量の合計を集団業績とした。このような試行を各事態で22回反復した。作業には演算が伴うため、作業量を数えながら進めていき、目標量に合わせることは困難であると考えられた。そのうえ各成員の加算数の相違、加算能力の個人差のため集団業績の予測と統制は一層困難と思われた。成員のひとはリーダーとして加算作業を行わず、作業開始と終了の合図や試行回数、集団目標、集団業績（必要となる事態に於て）を板書し、成員に情報を提供する等の仕事を行った。

集団の目標設定と提示、成員各々の個人目標の設定と報告、個人業績の報告、集団業績の提示、個人の自己評価と報告等に関する説明を実験前に行った。成員がリーダーに対して行う各種の報告は、TK-80を用いた集団反応分析装置を使用した。4人の成員はテン・キーをもつ

表1 集団成員別、加算数別 平均業績

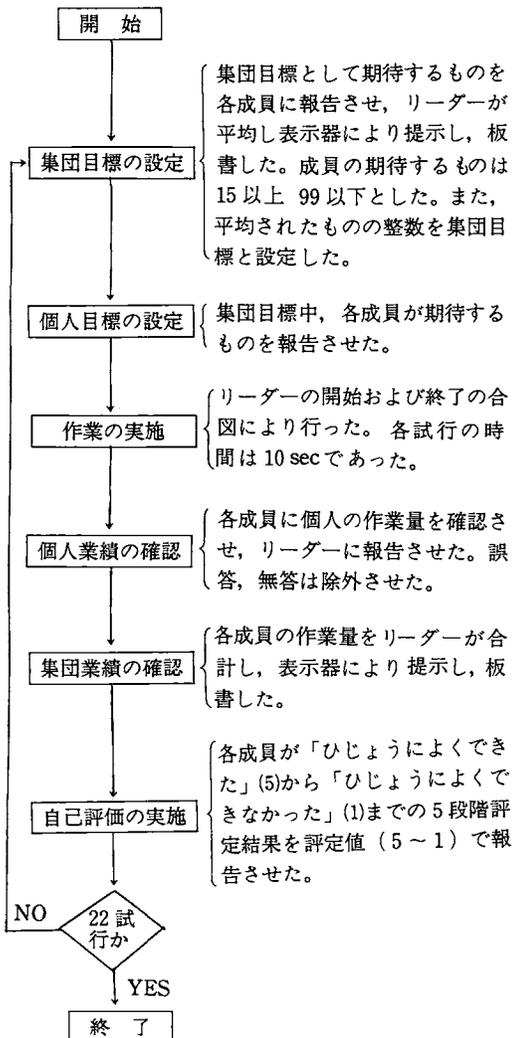
	1	2	3	4	5	M	SD	
A	1	16.00	16.00	11.67	14.33	13.33	14.27	2.49
	2	17.67	16.67	12.33	14.33	15.33	15.27	2.29
	3	19.33	16.00	14.00	12.33	12.33	14.80	3.53
	4	18.33	16.67	16.00	18.00	15.00	16.80	2.54
B	1	21.67	18.67	13.00	14.00	12.33	15.93	3.86
	2	18.00	18.33	14.00	10.33	16.33	16.07	2.89
	3	24.33	18.33	16.33	17.33	15.67	18.40	4.22
	4	23.67	24.00	17.67	17.67	20.00	20.60	3.20

子器により2桁の数を報告した。成員達の報告した数字の合計または平均は表示器に示された。

集団業績は各成員の作業量を合計したものとすること。集団目標を設定するときには、各成員の期待する集団目標をリーダーが平均することによって決定されるものであること、そしてこのような集団目標を追求するためには、各成員が協力する必要のあること等を理解させた。

実験では、業績調整課題と要求水準課題の各々が課せられるので、両課題に取り組む前に

業績調整課題（事態1）



集団成員にじゅうぶん説明し、理解させた。

実験事態は、業績調整課題と要求水準課題の各々で事態1と事態2であった。事態1では、集団目標と集団業績に関する情報が成員に与えられ、事態2では、集団目標に関する情報のみが与えられた。

実験の手順を業績調整課題（事態1）について流れ図で例示すると、左の通りである。

事態2では、「集団業績の確認」を省いた。また、要求水準課題では、集団目標として成員の期待するものについて範囲を指定しなかった。2課題、2事態の実施順序の影響は少くなるようにした。

実験実施の期間は、1982年6月8日から7月7日までであった。実験は小学校の放課後1事態づつ行った。各課題の1事態に約1時間を要した。個人作業量を測定するための予備検査およびソシオメトリック・テストは、6月4日および5日に実施した。

実験結果

1 $(1 - E^{-1}) G(t)$, $E^{-1}\epsilon(t)$ と $P(t)$ との関係

集団業績が、集団目標の変化量および集団目標と集団業績の偏差といかに関連するかを明らかにするため、 $(1 - E^{-1}) G(t)$, $E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $P(t)$ の重回帰係数および重相関係数を示すと表2の通りとなる。 $(1 - E^{-1}) G(t)$ はフィードフォワードに関する情報の一つとみられるが、業績調整課題、要求水準課題の双方とも正の回帰係数となっているが、大きな値となる場合は少い。これに対して $E^{-1}\epsilon(t)$ は、フィードバックに関する情報の一種とみられるが、業績調整課題では正の回帰係数となる傾向が強く、とくに事態1で大となっている。しかし要求水準課題では負となり、絶対値もさほど大きくはない。このことは、要求水準課題にとって、フィードバック情報があまり効果的なものでないと考えられる。重相関係数は、業績調整課題の方が、要求水準課題より高く、事態1と

表 2 $(1-E^{-1})G(t), E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $P(t)$ の重回帰係数および重相関係数 (業績調整課題)

	C	α_3	α_1	R	F(3.17)	
1	A	.49.820	.137	.747	.612	3.386*
	B	.77.958	.360	.420	.677	4.795*
2	A	.53.280	.219	-.138	.295	.540
	B	.76.805	.079	.250	.453	1.463

注) 1, 2 は事態 1, 2 を示し, A は材木町小の集団を, B は芳育町小の集団を示す。

	C	α_3	α_1	R	F(3.17)	
1	A	.61.880	.488	.303	.425	1.252
	B	.69.218	.191	-.026	.425	1.249
2	A	.63.030	.101	-.013	.254	.389
	B	.56.495	.027	-.030	.079	.035

表 3 $(1-E^{-1})G(t), E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $P(t)$ の標準重回帰係数 (業績調整課題)

	a_3	a_1	
1	A	.140	.631
	B	.761	.448
2	A	.179	-.176
	B	.216	.520

(要求水準課題)

	a_3	a_1	
1	A	.571	.374
	B	.396	-.048
2	A	.237	-.024
	B	.039	-.048

事態 2 を比較すると事態 1 の方が大となる。この結果を反映して、とくに業績調整課題の事態 1 は大となり、有意な F の値となっている。

これらの変数についての標準重回帰係数を示したのが表 3 である。また偏相関係数を示したのが表 4 である。 $(1-E^{-1})G(t)$ と $E^{-1}\epsilon(t)$ 間は負の偏相関となり、有意となる場合が多い。とくに要求水準課題では、事態 1, 事態 2 のすべてにおいて有意である。 $E^{-1}\epsilon(t)$ と $P(t)$ 間は、業績調整課題の場合には正で有意となる

表 4 $P(t), (1-E^{-1})G(t), E^{-1}\epsilon(t)$ 間の偏相関係数 (業績調整課題)

	$r_{12.3}$	t	$r_{13.2}$	t	$r_{23.1}$	t	
1	A	.170	.730	.612	3.28**	-.295	1.311
	B	.674	3.869**	.473	2.277*	-.626	3.401**
2	A	.171	.736	-.169	.725	-.336	1.515
	B	.206	.891	.451	2.146*	-.528	2.640*

注) 偏相関 r のサフィックス 1, 2, 3 は, $P(t), (1-E^{-1})G(t), E^{-1}\epsilon(t)$ の各変数を示す。

	$r_{12.3}$	t	$r_{13.2}$	t	$r_{23.1}$	t	
1	A	.425	1.993	.295	1.307	-.702	4.184**
	B	.339	1.527	-.044	.186	-.519	2.576*
2	A	.183	.787	-.019	.080	-.638	3.519**
	B	.031	.131	-.037	.159	-.621	3.361**

(要求水準課題)

ことが多い。そして $P(t)$ と $(1-E^{-1})G(t)$ 間は、あまり顕著ではない。

$(1-E^{-1})G(t)$ と $E^{-1}\epsilon(t)$ との一次結合は、ときに $\{G(t)-E^{-1}P(t)\}$ となる。そこで、 $\{G(t)-E^{-1}P(t)\}$ に対する $P(t)$ の回帰係数を求めると、表5の通りとなる。この回帰係数は、業績調整課題、要求水準課題を通してほとんど正の値をとり、負となる場合は、絶対値が大きい。事態1、2別に比較すると事態1の方が事態2より大となる傾向が強い。相関係数は、事態1でより高くなるようである。これらのことは、先の結果と符合するものである。

表5 $\{G(t)-E^{-1}P(t)\}$ に対する $P(t)$ の回帰係数 (業績調整課題)

		C	α	R	F
1	A	47.724	.365	.423	1.957
	B	77.521	.361	.674	7.489**
2	A	53.629	-.073	-.091	.074
	B	75.845	.121	.299	.882
(要求水準課題)					
		C	α	R	F
1	A	61.930	.380	.374	1.466
	B	70.468	.109	.200	.374
2	A	63.130	.080	.145	.193
	B	56.777	-.007	.011	.001

2 $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ と $G(t)$ との関係

集団目標の設定が、前試行の集団業績および集団目標といかに関連するかを明らかにするため、 $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ に対する $G(t)$ の重回帰係数および重相関係数を示すと表6の通りとなる。 $E^{-1}G(t)$ の回帰係数は、業績調整課題、要求水準課題の双方とも正の値となっているが、業績調整課題のA集団でとくに大となっている。要求水準課題ではB集団で比較的大きい。集団間の差が著しいようである。 $E^{-1}P(t)$ は、業績調整課題の事態1以外は正の値となっており、要求水準課題でとくに大である。全般に業績調整課題では $E^{-1}G(t)$ が $E^{-1}P(t)$ より大きく、要求水準課題では $E^{-1}P(t)$ が $E^{-1}G(t)$ より大きくなる。業績調整課題では集団目標の設定に際して、 $E^{-1}G(t)$ の方が強く関係する。つまり集団目標が以前にどの程度のものであったかを重視する。しかし、要求水準課題では集団目標の設定に際して、 $E^{-1}P(t)$ の方が強く関係する。すなわち集団業績が以前にどの程度であったかが重視されるという傾向がみられる。 $E^{-1}\epsilon(t)$ との関係を設定すると、業績調整課題では、 $E^{-1}\epsilon(t)$ との関係が強く、要求水準課題では $-E^{-1}\epsilon(t)$ との関係が強いと考えられる。重相関係数は、かなり認められるが有意となる場合は必ずしも多くない。

$E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ に対する $G(t)$ の標準回帰係

表6 $E^{-1}P(t)$ に対する $G(t)$ の重回帰係数および重相関係数

		C	α_{21}	α_{22}	R	F(3.17)
1	A	18.137	-.179	.793	.757	7.588**
	B	69.550	-.245	.254	.171	.171
2	A	-1.002	.249	.767	.797	9.866**
	B	46.389	.009	.331	.315	.625
(要求水準課題)						
		C	α_{21}	α_{22}	R	F
1	A	38.918	.354	.008	.394	1.040
	B	1.452	.576	.357	.445	1.402
2	A	20.726	.558	.109	.340	.742
	B	-5.676	.572	.422	.604	3.258*

数を示したのが表 7 である。また、これらの変数間の偏相関係数を示すと表 8 の通りとなる。

$G(t)$ が $E^{-1}G(t)$ と有意な偏相関をみるのは、業績調整課題の A 集団のみである。 $G(t)$ が $E^{-1}P(t)$ と有意となる場合は、要求水準課題の 1 事例に過ぎない。

$E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ の一次結合として $G(t)$ を表わすとき、特殊な場合として $\{E^{-1}P(t) - E^{-1}G(t)\}$ が想定できる。この $-E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $G(t)$ の回帰係数を求めると表 9 の如くなる。この変数に対する回帰係数は負となることが多い。とくに業績調整課題ではすべて負となる。これは、先の結果と符合する。相関係数が有意となる場合は業績調整課題の 1 事例のみである。

表 7 $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ に対する $G(t)$ の標準回帰係数 (業績調整課題)

		a_{21}	a_{22}
1	A	-.146	.874
	B	-.160	.260
2	A	.217	.695
	B	.004	.314

(要求水準課題)

		a_{21}	a_{22}
1	A	.393	.008
	B	.269	.327
2	A	.305	.103
	B	.421	.386

表 8 $G(t)$, $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ 間の偏相関係数

(業績調整課題)

		$r_{12.3}$	t	$r_{13.2}$	t	$r_{23.1}$	t
1	A	-.121	.519	.592	3.114 **	.741	4.677 **
	B	-.104	.443	.167	.718	.770	5.114 **
2	A	.320	1.432	.734	4.580 **	-.012	.049
	B	.004	.016	.290	1.283	.384	1.767

(要求水準課題)

		$r_{12.3}$	t	$r_{13.2}$	t	$r_{23.1}$	t
1	A	.393	1.813	.009	.038	.016	.068
	B	.286	1.265	.341	1.538	.002	.010
2	A	.303	1.348	.107	.456	.153	.655
	B	.464	2.223 *	.433	2.037	-.104	.442

表 9 $-E^{-1}\epsilon(t)$ に対する $G(t)$ の回帰係数および相関係数 (業績調整課題)

		C	α_2	R	F(2.18)
1	A	46.945	-.937	-.576	4.478 *
	B	70.209	-.256	-.171	.272
2	A	51.390	-.289	-.294	.850
	B	71.818	-.323	-.281	.771

(要求水準課題)

		C	α_2	R	F
1	A	61.021	.196	.288	.813
	B	64.349	-.191	-.188	.328
2	A	62.692	.023	.025	.006
	B	45.627	-.046	-.050	.023

3 P(t), G(t)とV(t)との関係

自己評価が、集団業績および集団目標といかなる関係をもつかをみるため、P(t), G(t)に対するV(t)の重回帰係数および重相関係数を示すと表10の通りとなる。自己評価は、集団的な評価ではないので、 W_4 を推定することには限界があるが、各成員の5～1の評定値の合計を集団の自己評価と見做して検討したのである。P(t)に対する回帰係数は、業績調整課題の事態1で負となるが、事態2の場合や要求水準課題では正となっている。しかし絶対値はいずれも小さい。これに反してG(t)に対する回帰係数は、符号がP(t)に対するものとは逆となっている。つまり

業績調整課題の事態1で正となるが、事態2の場合や要求水準課題では負となっている。この場合も絶対値はすべて小さい。業績調整課題の事態1でG(t)に対するものがP(t)に対するものより大となるのは、集団目標の設定が集団業績より積極的な影響を及ぼしていることを示している。しかしそれ以外の場合では、集団業績が集団目標設定より積極的な影響を及ぼすようである。 $\epsilon(t)$ との関係を想定すると業績調整課題の事態1では、 $\epsilon(t)$ との関係が強く、要求水準課題では、 $-\epsilon(t)$ との関係が強いようである。重相関係数は、両課題、両事態ともかなり高い。とくに要求水準課題では有意となっている。

表10 P(t), G(t)に対するV(t)の重回帰係数および重相関係数
(業績調整課題)

		C	α_{41}	α_{42}	R	F(3.18)
1	A	3.868	-.040	.035	.388	1.062
	B	3.582	-.043	.055	.676	5.049*
2	A	1.283	.070	-.029	.582	3.075
	B	2.206	.065	-.044	.745	7.492**

		C	α_{41}	α_{42}	R	F
1	A	-1.472	.101	-.016	.711	6.138**
	B	3.686	.060	-.057	.732	6.932**
2	A	-.262	.076	-.014	.708	6.019**
	B	2.418	.059	-.032	.700	5.752**

P(t), G(t)に対するV(t)の標準回帰係数は表11に示されている。またこれらの変数間の偏相関係数は表12の通りとなる。V(t)とP(t)間の偏相関の正のものは、いずれも有意となっている。V(t)とG(t)の偏相関はB集団のみ有意であり、集団差が大きいようである。

P(t), G(t)の一次結合としてV(t)を表わす場合の特殊なものとして{P(t)-G(t)}を考え、この $-\epsilon(t)$ に対するV(t)の回帰係数を求めると表13のようになる。P(t), G(t)に対するV(t)の重回帰係数から想定できる結果となっている。すなわち業績調整課題の事態1では負になるが、その他の場合および要求水準課題では正とな

表11 P(t), G(t)に対するV(t)の標準回帰係数 (業績調整課題)

		a_{41}	a_{42}
1	A	-.547	.684
	B	-.486	.974
2	A	.646	-.289
	B	.484	-.771

		a_{41}	a_{42}
1	A	.716	-.089
	B	.408	-.751
2	A	.726	-.245
	B	.624	-.459

表 12 V(t), P(t), G(t) 間の偏相関係数

(業績調整課題)							
	$r_{12.3}$	t	$r_{13.2}$	t	$r_{23.1}$	t	
1	A	-.319	1.465	.387	1.832	.844	6.852**
	B	-.388	1.837	.646	3.684**	.792	5.648**
2	A	.582	3.120**	-.305	1.395	.514	2.610*
	B	.560	2.943**	-.732	4.689**	.616	3.411**

(要求水準課題)							
	$r_{12.3}$	t	$r_{13.2}$	t	$r_{23.1}$	t	
1	A	.711	4.408**	-.125	.549	.167	.738
	B	.494	2.474*	-.723	4.557**	.547	2.846*
2	A	.706	4.344**	-.319	1.467	.387	1.828
	B	.651	3.735**	-.533	2.745*	.470	2.324*

表 13 $\varepsilon(t)$ に対する V(t) の回帰係数

(業績調整課題)					
	C	α_4	R	F(2,19)	
1	A	3.634	-.034	-.382	1.624
	B	4.488	-.057	-.663	7.453**
2	A	3.435	.047	.476	2.786
	B	3.804	.044	.728	10.719**

(要求水準課題)					
	C	α_4	R	F	
1	A	3.778	.068	.586	4.976*
	B	3.889	.058	.732	10.959**
2	A	3.622	.025	.432	2.180
	B	3.802	.041	.656	7.184**

る。しかし絶対値はさほど大きくはない。相関係数はいずれもかなり大きく、とくにB集団は有意となる傾向が強い。

要約および考察

この研究は、小集団の自己調整システムの解明を目的とした一連の実験の一つである。今回は、とくに業績調整課題と要求水準課題に関する集団目標追求過程を比較しようとした。

集団の自己調整システムにおけるいくつかのオペレーターを考え、集団目標、集団業績、自己評価等の変数間にいくつかの差分方程式が成り立つとみて、それらの係数を具体的な入出力から、線型回帰係数を用いて推定した。

被験児は、小学校5年男子で、5名よりなる

2集団を編成した。

実験で課した作業は、1試行10sec間、乱数系列に1から4までの数を加算するというもので22試行を行った。各集団の成員4名のひとは1を加算し、別のひとは2を加算するという具合に成員が各々異なる加算作業を行った。成員のひとはリーダーで、作業の進行、各種情報の収集、提供を行った。集団目標は成員が設定し、それを平均して設定した。個人業績の合計を集団業績とした。自己評価は、5段階の評定尺度に各成員が評定した。各成員とリーダーの情報の報告、提供は、TK-80を用いた集団反応分析装置とその子器および表示器であった。主な情報は、リーダーが板書した。

実験では、業績調整課題と要求水準課題の

各々が課せられた。各課題では事態1, 事態2が作られた。事態1では, 集団目標と集団業績に関する情報が成員に与えられ, 事態2では集団目標に関する情報のみが与えられた。

実験実施の期日は, 予備検査を含めると1982年6月4日から7月7日までであった。

集団業績が, 集団目標の変化量および集団業績の偏差といかに関連するかをみるため, $(1 - E^{-1})G(t)$, $E^{-1}\varepsilon(t)$ に対する $P(t)$ の重回帰係数, 重相関係数, 標準回帰係数, 偏相関係数を求めた。フィードフォワードに関する情報は, 集団業績に正の関係を示すが, フィードバックに関する情報は, 業績調整課題では正, 要求水準課題では逆となる傾向がみられた。

$\{G(t) - E^{-1}P(t)\}$ に対する $P(t)$ の回帰係数は正となることが多い。事態1の方が大となる傾向が強い。

集団目標が, 前試行の集団業績と集団目標といかに関連するかをみるため, $E^{-1}P(t)$, $E^{-1}G(t)$ に対する $G(t)$ の重回帰係数等を求めた。集団目標は前試行のそれに正の関係を示すが, 前試行の集団業績に対しては, 業績調整課題の事態1では負となった。業績調整課題では集団目標の方が強く, 要求水準課題では集団業績の方が強く関係する傾向がみられた。

$-E^{-1}\varepsilon(t)$ に対する $G(t)$ の回帰係数は負となることが多い。

自己評価が, 集団業績および集団目標といかに関係するかをみるため, $P(t)$, $G(t)$ に対する $V(t)$ の重回帰係数等を求めた。自己評価は集団業績に対して業績調整課題以外は正の関係を示すが, 集団目標に対しては逆の関係を示す。

$-\varepsilon(t)$ に対する $V(t)$ の回帰係数は, 業績調整課題の事態1以外では正の関係を示す。

この実験は, 2集団について, 業績調整課題および要求水準課題で, 2事態を設けて結果を比較検討した。しかしきわめて少数例であった。今後, 同一手続きによる多くの標本について調べてみる必要があると思われる。

また, 実験結果は, 集団目標, 集団業績等の

集団の変数を中心として分析した。しかし, 成員個人が集団目標としてどのようなものを期待したか, 集団目標に応じて個人目標をいかに設定し, いかなる業績を挙げたか, そしてどのような自己評価を行ったかという, 集団機能の基盤としての個人機能について詳細に分析する必要があると思う。とくに要求水準課題では, 個人の要求水準課題といかなる変容をもたらすものであるかを考察する必要もあると思われる。

〔付記〕この研究は, 金沢市立材木町小学校の小川宏教諭, 同市立芳斉町小学校の越田豊教諭はじめ両校の多くの方々との協力を得て行なわれた。ここに深く感謝する次第である。

参考文献

- Festinger, L. 1942 Wish, expectation, and group standards as factors influencing level of aspiration. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 37, 184-200.
- Hall, R.L. 1957 Group performance under feedback that confounds responses of group members. *Sociometry*, 20, 277-305.
- Heise, G.A., & Miller, G.A. 1951 Problemsolving by small groups using various communication nets. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 16, 327-333.
- Jenkins, D.H. 1948 Feedback and group self-evaluation. *Journal of Social Issues*, 4, 50-60.
- 狩野素朗 1971 課題解決集団の能率および成員満足感におよぼすコミュニケーション構造特性と課題特性の関連に関する実験的研究 教育社会心理学研究, 10, 133-144.
- Leavitt, H.J. 1951 Some effects of certain communication patterns on group performance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 38-50.
- Leavitt, H.J., & Mueller, R.A.H. 1951 Some effects of feedback on communication. *Human Relations*, 4, 401-410.
- Medow, H., & Zander, A. 1965 Aspirations for the group chosen by central and peripheral members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 224-228.
- 太田雅夫 1957 討議集団の自己調整機構の研究 I

- 心理学研究, 28, 74-85.
- 太田雅夫 1974 集団の自己調整システム 金沢大学教育学部紀要, 23, 181-195.
- 太田雅夫 1975 集団の自己調整システム——フィードバック情報による集団目標と集団業績の調整——金沢大学教育学部紀要, 24, 17-30.
- 太田雅夫 1976 集団課題解決におけるコミュニケーションの役割 金沢大学教育工学研究, 1, 71-85.
- 太田雅夫 1981a 目標追求活動における自己調整システム——要求水準実験の一考察——金沢大学教育学部紀要, 29, 1-9
- 太田雅夫 1981b 目標追求活動における自己調整システム——要求水準の達成過程の分析(1)——金沢大学教育工学研究, 7, 105-113
- 太田雅夫 1982 目標追求活動における自己調整システム——要求水準の達成過程の分析(3)——金沢大学教育工学研究, 8, 49-60
- Masao Ohta 1982 Self-control System of Small Groups: Effects of Feedforward and Feedback, *Psychologia*, 25, 2, 71-80.
- Pryer, M., & Bass, B.M. 1959 Some effects of feedback on behavior in groups. *Sociometry*, 22, 56-63.
- Rosenberg, S., & Hall, R.L. 1958 The effects of different social feedback conditions upon performance in diadic teams. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 57, 271-277.
- Shaw, M.E. 1954 Some effects of problem complexity upon problem solution efficiency in different communication nets. *Journal of Experimental Psychology*, 48, 211-217.
- Shaw, M.E. 1964 Communication networks. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.1. Academic press.
- Smith, K. H. 1972 Changes in group structure through individual and group feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 425-428.
- Steiner, I.D. 1972 *Group process and productivity*. Academic Press.
- Steiner, I.D. 1974 *Task-performing group*. General Learning Press.
- 続 有恒・太田雅夫 1958 集団の自己調整機構の研究 II 心理学研究, 29, 253-263.
- Zander, A., & Forward, J. 1968 Position in group, achievement motivation, and group aspirations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 282-288.
- Zander, A., & Medow, H. 1963 Individual and group levels of aspiration. *Human Relations*, 16, 89-105.
- Zander, A., & Medow, H. 1965 Strength of group and desire for attainable group aspiration. *Journal of Personality*, 33, 129-139.
- Zander, A., & Newcomb, T. Jr. 1967 Group level of aspiration in United Fund Campaigns. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 157-162.